一括資料からみた長崎遺跡群
―― 基礎的研究と課題 ――

川口　洋平

1．はじめに

長崎は，元亀二年（1571）に大村純忠によって開港され，それまで平戸・横瀬浦・福田などへ寄港していたポルトガル船が入港するようになった。それ以後，徳川幕府による鎖国政策の過程を経たが，一貫して海外へ開かれた港市として独自の発展を遂げた。近年，考古学的手法による発掘調査が，その一端を明らかにしつつあるが，相互の調査成果に基づいた時間的・空間的な把握は，それほど進んではいない。

本稿では，最近の調査成果をもとに，基礎的な研究として，開港から17世紀初頭頃までの一括資料について検討し，研究の問題点や課題などを抽出していきたい。

2．「遺跡」の整理的理解

（1）調査の履歴と研究史

いわゆる「近世長崎」の発掘調査は，1984年頃に行われた出島和蘭商館跡の整備に関連した調査に始まったと考えられる（市教委1986）。

1990年代前半になると旧町域の調査が行われるようになった。万才町遺跡では，1991年に２カ所で調査が行われ，多くの国産遺物のほか中国・東南アジア・ヨーロッパの遺物が出土した（市教委1992ａ・ｂ）。また，同年に北側に隣接した興善町でも調査が行われ，桃山陶器がまとまって出土するなどの成果があった（市1992）。1992年には，栄町遺跡と銅座町遺跡で調査が行われた。栄町遺跡では，東南アジア産の陶器がまとまって出土している（協議会1993）。銅座町遺跡は，対馬藩蔵屋敷に相当するが，明和年間の絵図にある石垣などが確認されている（協議会1993）。1993年には，県庁新別館の立て替えのため，万才町遺跡の調査が行われ，長崎町建て期の生活面が確認されたほか，火災による整理土坑や整地面などが確認された（県教委1995）。1994年には，人工に築いた島である新地唐人荷蔵跡の調査が行われ，護岸の石垣などが確認されている（協議会1996）。

1990年代後半には，開港以来の古い歴史をもつ台地を中心に調査例が増えてくる。1995年には，平戸町に相当する万才町遺跡で調査が行われ，町建て期の遺構が確認されたほか火災による焼土層も確認された（協議会1996）。また，東側に隣接する築町遺跡の調査では，メダイ・聖骨箱・指輪・ワイングラスなど豊富なヨーロッパ製品が出土している（市教委1997）。さらに，やや北よりの桜町遺跡の調査が行われ，寛文三年（1663）の大火に伴う良好な一括資料が出土している（県教委1998）。1996年には，勝山町遺跡の調査が行われ，花十字瓦などが出土している（註１）。1997年には，興善町遺跡の調査が行われている。焼土を含んだ土坑が確認されているが，出土遺物など詳細については，残念ながら報告されていない（市教委1997）。また，長崎市が行った桜町遺跡の調査で，18世紀を主体とする土坑が，約70基確認されている（註２）。

一方，長崎をテーマとした考古学的研究は，永松実が，1990年代前半に多くを発表している。永松は，出土遺物の中から西洋陶器・クレーパイプ・桃山陶器・瓦などについて出

図１　関係旧町の位置　＊寛永長崎港図（長崎市立博物館蔵）をトレース（註３）

①大村町（万才町・県 1995）
②平戸町（万才町・市 1996）
③内下町（築町・市 1997）
④豊後町（桜町・県 1998）

土状況の整理を行い，考察を行っている（永松1993・1996ほか）。また，扇浦正義が，陶磁器について，産地ごとに編年的な紹介を行っている（扇浦1994）。宮崎貴夫は，貿易の背景をふまえながら，貿易陶磁の出土状況について考察を行う一方（宮崎1994・1998），担当した万才町遺跡で確認された，寛文三年（1663）の大火に伴う整理土坑から出土した一括資料についても紹介している（宮崎1997・1999）。

（2）「長崎遺跡群」の提唱

これまでの発掘調査を概観すると，出土した遺物には，西洋・東南アジア・中国などの資料が豊富に含まれており，「海外へ開かれた港市」を実証してきたということでは大きな成果があったといえるであろう。しかし，調査が増加し，精度が向上するにつれて問題も生じている。その根本的なものとして，遺跡が体系的に把握されていないということがあげられよう。長崎の旧町域は，遺跡としての周知の問題から（註４），虫食いのように発掘調査が行われている。さらに，明治以降の町名・町域の変更で，旧町との整合性についての矛盾が大きいのが現状である（註５）。

これらは，各遺跡（調査地点）間の生活面や層位的な関係を，非常にわかりにくくしており，調査者自身が，担当地区の歴史的変遷というミクロ的な理解に終始してしまうことになる。以下は，近接した三つの調査事例であるが，それぞれ独自の時期区分を行っており，相互に対応していないため，時間的・空間的な理解が困難になっている。

	万才町（県1995）	万才町（市1996）	築町遺跡（市1997）	
1571（元亀二）六カ町成立				
	Ⅰ期			
1601（慶長六）慶長火災		第４期	Ⅰ期	
	Ⅱ－１期			
1610年代				1630年代
	Ⅱ－２期			
1650年代			Ⅱ期	1640年代
	Ⅲ期	第３期	Ⅲ期	1663大火
1690年代				

また，同一生活面という視点の欠如は，相互比較によって，遺構や遺物の時期を推測していく上でも大きな障害となっている。筆者は，以上の問題を解決していくために，報告書の刊行されている遺跡（地区）を最小単位として，歴史的な側面をふまえて以下のような整理を試みた。

長崎遺跡群
- A．旧町名　（例）大村町　（調査例）万才町・県1995
  - 平戸町　　万才町・市1996
  - ：　　：
- B．拠点的施設（例）長崎奉行所　（調査例）県1998
  - ：　　：

【実際の表記例】大村町（万才町・県1995），長崎奉行所（県1998）など

長崎遺跡群とは，元亀二年（1571）の開港以来形成された長崎の主たる旧町（A）と拠点的施設（B）の総称とする（註６）。これは，港市長崎を形成した個々の場や機能の集合体としての呼称であり，この下に本来の遺跡名というべき，旧町名や施設名がくる。さらに，現在の遺跡名や調査者を対応させることで，体系的な把握を容易にした（註７）。

今後の調査成果の蓄積を考えると，以上のような骨格となる整理法が必要であろう。また，調査者だけでなく，外部の研究者にとっても，データの利用が容易になるものと考えられる。検討の余地も多いにあるが，試案として提示しておきたい。

３．一括資料の抽出と再検討

（１）扱う資料について

錯綜する長崎遺跡群の調査ではあるが，近年になり，ようやく遺構一括資料の報告がなされるようになってきた。また，これらの資料により，遺構の年代についても検討がなされるようになってきている。本稿では，これらの資料について再検討を行い，元亀二年の長崎開港から17世紀初頭にかけての遺物の様相について考察を行いたい。扱う資料としては，遺構一括資料の報告がある大村町，平戸町，内下町，豊後町の四つの調査に限った。このほかの調査報告では，遺物の出土状況（遺構・層位）が明確でなく，共伴する遺物が不明であり，資料操作が不可能であると判断した。

調査が行われた旧町の概略を記すと，大村町と平戸町は，共に元亀二年（1571）の長崎町建ての際にできたとされる六町に含まれる。今回扱う資料の年代について最も古い時期を比定できる町域といえよう。内下町と豊後町は，六町ができて以後，人口の増加に伴い周囲にできた後の「内町」に含まれる。その町建ての年は明らかではないが，さらに外側に追加された「外町」が慶長二年（1597）以後にできたことを考えれば，文禄年間（1590年代前半）までにはできたのではないかと考えられる（註８）。以上の調査報告から，17世紀中頃までの主な遺構一括資料を抽出したのが表１である。

これらの遺構の中には，共伴関係が曖昧な遺構も少なからず含まれている。そこで今回は，比較的に遺物が豊富でまとまりが良いもの，あるいは，他の遺構に共通する遺物を含むものを中心に，扱う資料をさらに絞り込むことにした。抽出した遺構名は以下のとおりである。①と②の資料の中で，報告者により同時期とされているものについては，ひとまず遺構群というかたちで，各期ごとに整理してみたい。

①大村町（万才町・県1995）

Ⅰ期　ＳＫ103，ＳＫ183，ＳＫ192，ＳＫ193，ＳＫ208，ＳＥ１下層，ＳＥ７

Ⅱ－１期　ＳＫ33，ＳＫ128，ＳＫ205，ＳＫ206，ＳＫ207

Ⅱ－２期　ＳＸ11，ＳＫ401，ＳＢ６－６層

②平戸町（万才町・市1996）１号井戸，溝状石列３

③内下町（築町・市1997）　２区12号土坑

④豊後町（桜町・県1998）　土坑26

大村町
（万才町1995）

遺構名	内　　容	時期	備　考
ＳＫ１０３	東南アジア？、瀬戸・美濃、小野皿Ｅ	Ⅰ	
ＳＫ１８３	小野皿Ｅ、鈴木皿Ｇ	Ⅰ	
ＳＫ１９３	小野碗・皿Ｅ、瓦質擂鉢	Ⅰ	
ＳＫ２０８	小野碗Ｅ、青花鉢、スワトウ	Ⅰ	
ＳＫ１９２	小野碗・皿Ｅ、森碗Ⅳａ、小野皿Ｂ２	Ⅰ	
ＳＥ１下層	瀬戸・美濃天目、小野碗・皿Ｅ、森Ⅱｂ、瓦質香炉	Ⅰ	
ＳＥ７	小野碗・皿Ｅ、東南アジア？	Ⅰ	
ＳＫ３３	小野碗・皿Ｅ、森碗Ⅳａ、小野白磁皿Ｃ、瓦質香炉	Ⅱ－１	
ＳＫ１２６	小野皿Ｅ、スワトウ	Ⅱ－１	
ＳＫ１２８	土師皿、小野皿Ｆ、小野白磁皿Ｃ、ベトナム系壺	Ⅱ－１	
ＳＫ２０５	小野皿Ｅ・Ｆ、五彩蓋、青磁香炉、白磁小碗、褐釉壺	Ⅱ－１	
ＳＫ２０６	小野皿Ｅ、唐津鉢、瓦質火舎	Ⅱ－１	
ＳＫ２０７	小野碗・皿Ｅ、小野皿Ｆ、東南アジア、楽茶碗、唐津碗	Ⅱ－１	
ＳＫ１７３	唐津折縁皿	Ⅱ	
ＳＫ５２	森碗Ⅳｂ、スワトウ	Ⅱ－１	
ＳＥ6古期	森碗Ⅳａ、芙蓉手鉢、スワトウ	Ⅱ－１	
ＳＸ１１	呉須赤絵、初期伊万里筒形碗	Ⅱ－２	
ＳＫ４０１	小野碗・皿Ｅ、森碗Ⅳａ、スワトウ、唐津徳利、備前	Ⅱ－２	
ＳＢ６－６層	小野皿Ｅ・Ｆ、スワトウ、白磁小碗、華南三彩盤、唐津皿	Ⅱ－２	

平戸町
（万才町1996）

遺構名	内容	時期	備考
6号土坑	唐津系甕	16Ｃ末～1630	
21号土坑	青花碗・皿、唐津、瓦質土器	16Ｃ後葉～17Ｃ前葉	
28号土坑	青花皿、金属製品	16Ｃ後葉～17Ｃ前葉	
１号井戸	青花、三彩、唐津、備前、土師皿	16Ｃ後葉～17Ｃ前葉	
溝状石列１	青花	16Ｃ後葉～17Ｃ前葉	
溝状石列２	青花、唐津、備前、東南アジア	16Ｃ後葉～17Ｃ前葉	
溝状石列３	青花、唐津、備前、東南アジア	16Ｃ後葉～17Ｃ前葉	遺物多い

内下町
（築町1997）

遺構名	内容	時期	備考
２区12号土坑	青花、スワトウ、華南陶器、東南アジア陶器ほか	1590～1520	初期伊万里なし
４区黒色土層	青花碗・皿・杯・小碗、ベトナム陶器	1590～1520	初期伊万里なし
２区13号土坑	青花、青磁、白磁（徳化窯）、初期伊万里	17Ｃ前半	

豊後町
（桜町1998）

遺構名	内容	時期	備考
土坑17	青花、唐津、伊万里、織部	16Ｃ末～17Ｃ前半	17Ｃ後半含む
土坑18	青花、唐津、伊万里、土師皿	17Ｃ前半	雷文青磁あり
土坑26	青花、唐津ほか	17Ｃ前半	良好な一括資料

表１　一括資料一覧表

（2）再検討と分析

抽出した遺構一括資料について，相互に比較検討を行うために，構成する遺物の再検討を行いたい。その前提として，各調査でまちまちに採用された分類を共通のものに直す必要がある。今回は，大村町で宮崎貴夫が行ったものをベースとして，中国産については，青花が小野正敏（1982），鈴木秀典（1990），森毅（1992），白磁は小野正敏（1985）の分類を，国産については，肥前陶磁を大橋康二（1993）の分類を用いた。また，瀬戸・美濃系の大窯製品については，藤澤良祐（1993）の時期区分を用いた。

①の大村町の調査における遺構を構成する遺物は，必然的に宮崎の報告をトレースすることになるが，整理すれば以下のようになろう。

［Ⅰ期の遺構群］

中国産　青花（小野碗Ｅ群，同皿Ｅ群，同皿Ｂ２群，鈴木皿Ｇ群，森碗Ⅳａ類，森碗Ⅱ２ｂ，漳州窯系鉢）

白磁（稜花皿）

東南アジア産　雑釉陶器碗

国産　瀬戸・美濃大窯製品（鉄釉筒形碗，鉄釉天目碗）※藤澤第３段階か

瓦質土器（すり鉢，火鉢）

その他　小杯（唐津または李朝）

［Ⅱ－１期の遺構群］

中国産　青花（小野碗Ｅ群，同皿Ｅ群，同皿Ｆ群，森碗Ⅳａ類，同碗Ⅳｂ類，同碗Ⅵ類，漳州窯系）

白磁（小野皿Ｃ群，小杯）

青磁（香炉）

その他（芙蓉手五彩皿，褐釉壺）

東南アジア産（ベトナム焼締壺，蓋か）

国産　楽茶碗（緑釉筒形碗）

唐津（褐釉鉢，灰釉皿）※胎土目期か

瓦質土器（香炉，火舎）

その他（土師皿）

［Ⅱ－２期の遺構群］

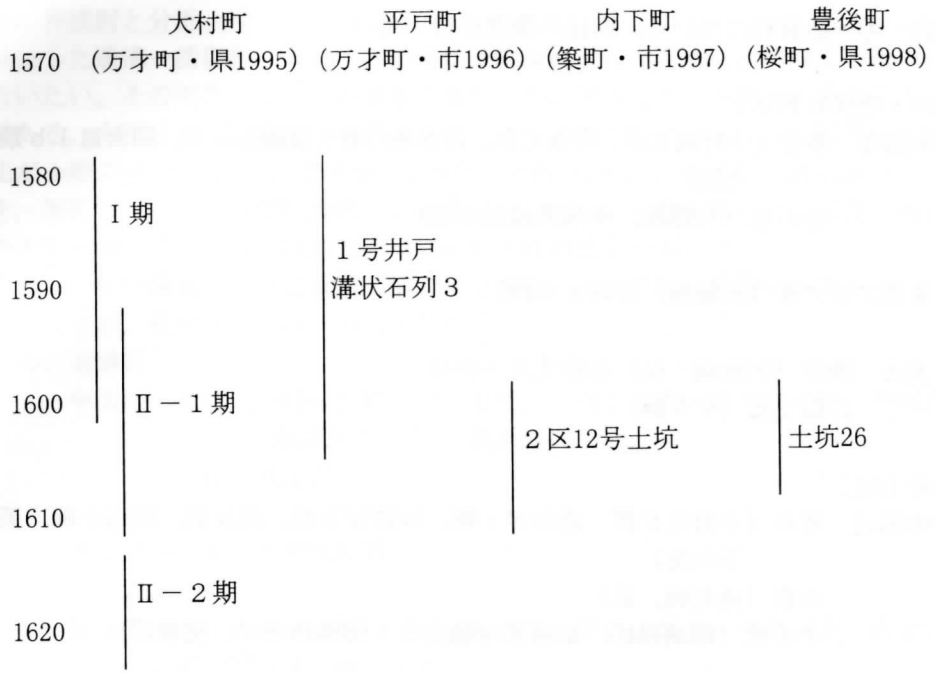
中国産　青花（小野碗Ｅ群，同皿Ｅ群，同皿Ｆ群，森Ⅳａ類，型押し小杯，漳州窯系）

その他（白磁小杯，青磁香炉，華南三彩盤，褐釉壺）

国産　唐津（飴釉片口，灰釉小皿）

伊万里（染付筒形碗，白磁鍔皿）

その他（備前すり鉢，瓦質火舎）



第2図　遺構併行関係モデル

大村町のⅠ期の上限の判断は難しいが，大坂城の豊臣前期（1580～1598年）にみられる瀬戸美濃大窯の筒形碗を含む。一方，小野青花碗・皿C群が入らないことも，注意すべきであろう。宮崎貴夫は，上限を長崎町建ての元亀二年（1571）としているが，C群の出土時期に含まれると考えられるため，やや時期を下げられるのではないかと考える（註9）。下限は，慶長六年（1601）の火災とされている。Ⅱ－1期の上限は，Ⅰ期に後続するものとされるが，小野白磁皿C群が含まれることから，一部の遺構は，Ⅰ期と重複するのではないかと考えられる。Ⅱ－1期の下限とⅡ－2期の上限については，初期伊万里の有無で判断するという宮崎の見解が妥当であろう。

平戸町の1号井戸・溝状石列3の上限は，遺物組成が大村町のⅠ期に近似することから，ほぼ同じ時期ではないかと考えられる。下限は，砂目積みの唐津皿の時期であるが，大坂城の豊臣後期にみられる青花の芙蓉手皿・鉢などは含まれないため，慶長の初めの頃ではないかと考えられる。

内下町の2区12号土坑の上限の判断は難しいが，芙蓉手皿や胎土目の唐津，志野皿などを含むことから，慶長の初め頃ではないかと考えられる。下限は，砂目の唐津の時期と考えられるが，初期伊万里は含まれず，遺物の年代のまとまりも良いことから，それほど下らないものと判断される。また，豊後町の土坑26は，青花芙蓉手皿と胎土目と思われる唐津の鉢から慶長初め頃と考えられる。

以上の判断から，上限と下限に若干の差があるものの，大村町Ⅰ期と平戸町1号井戸・溝状石列3がほぼ併行し，つづいて，大村町Ⅱ－1期，内下町2区12号土坑，豊後町の土坑26が併行するものと考えられる。

4．まとめ

（1）遺物の様相と変遷（図3）

一括資料の前後関係から，遺物の様相の変遷を整理すると，どのようになるのであろうか。併行関係にある大村町Ⅰ期の遺構群と平戸町の1号井戸・溝状石列3の時期は，貿易陶磁では，小野青花碗・皿E群を主体とし，同皿B2群，森碗Ⅳa類，粗製の鈴木碗・皿G群などがみられる。華南産の陶器もあるが，ごく少ない。東南アジア産のものでは，灰釉を施した粗製の碗がみられる。国産のものでは，瀬戸・美濃大窯の筒形碗がある。唐津は，胎土目から砂目の段階まであるが，少ない。

つづく，大村町Ⅱ－1期，内下町2区12号土坑，豊後町土坑26の段階では，小野青花碗・皿E群に，同皿F群のほか芙蓉手の皿・鉢などがみられる。華南産の陶器は，増加してくる。東南アジア産のものも，器種が豊富になっている（註10）。国産のものでは，唐津の胎土目から砂目の段階のものが豊富である。瀬戸・美濃大窯では，志野などがあるが，唐津に比すと少ない。

以上のふたつの段階は，上下限が重複していると考えられるので，その推移は画期的には捉えることができない。実年代の比定についても，紀年銘資料などの直接的な資料がないことから，現段階では難しい。あえていえば，大村町Ⅰ期と平戸町1号井戸・溝状石列3は，16世紀末頃，大村町Ⅱ－2期，内下町2区12号土坑，豊後町土坑26は，16世紀末から17世紀初頭ということになろう。

（2）今後の課題－時期区分の設定に向けて－

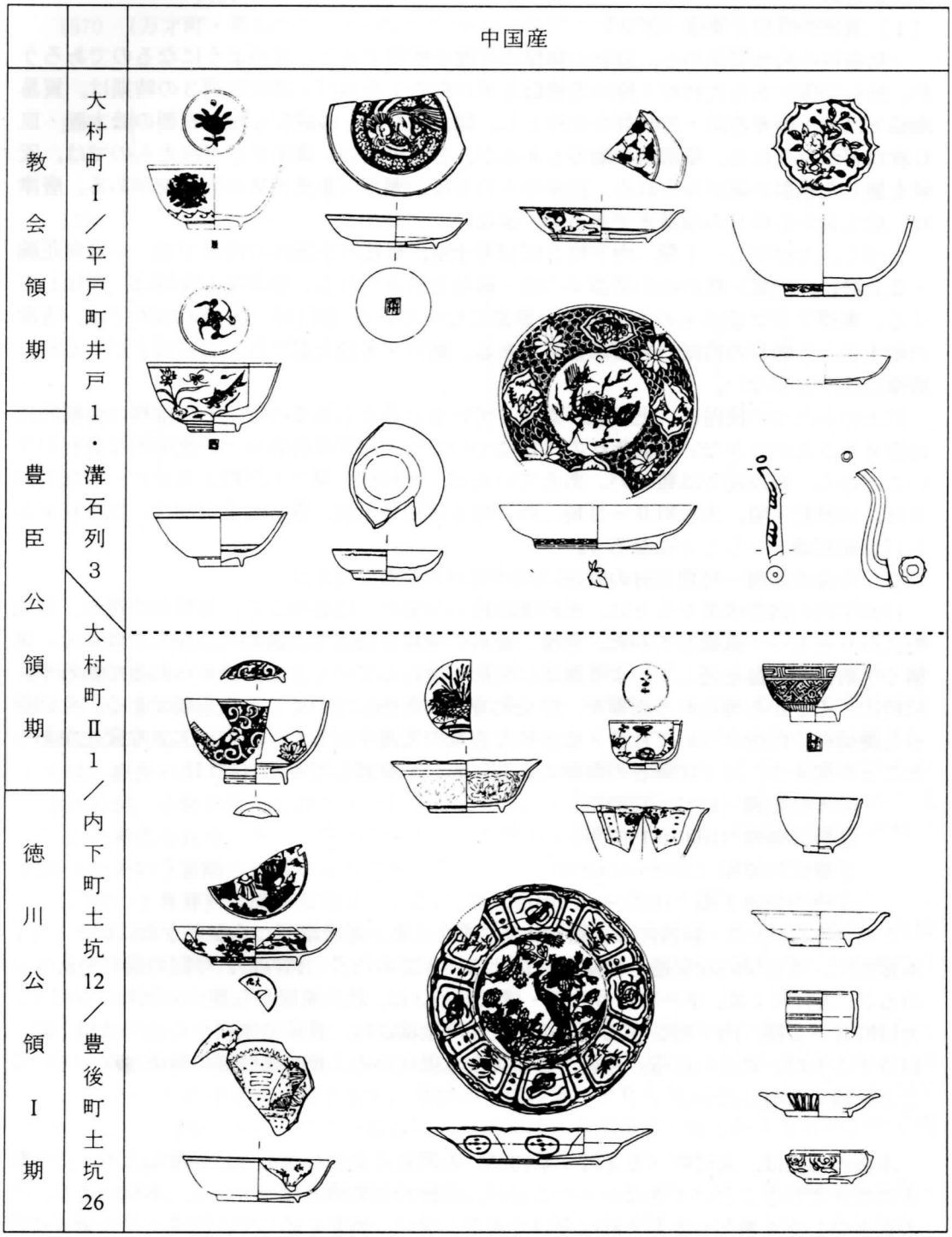
1990年代の調査成果をもとに，長崎遺跡群の初期の一括資料から，遺物の変遷を，空間的広がりをもって概観してみた。今後，資料の増加を待って，遺物だけからではなく，遺構や生活面の把握を通して，より緻密に分析・検討していくことが求められるであろう。同時に，そこから得られる画期を，歴史的背景に止揚していくことも重要である。今回扱った遺構群の前後について社会・政治的な背景の変遷をみると，非常に大きな変化があったことが伺える。以下に筆者の理解の範囲において整理してみた（註11）。

①大村領期（1571～1580年）
②教会領期（1580～1587年）
③豊臣公領期（1588～1600年）
④徳川公領Ⅰ期（1600～1610年）

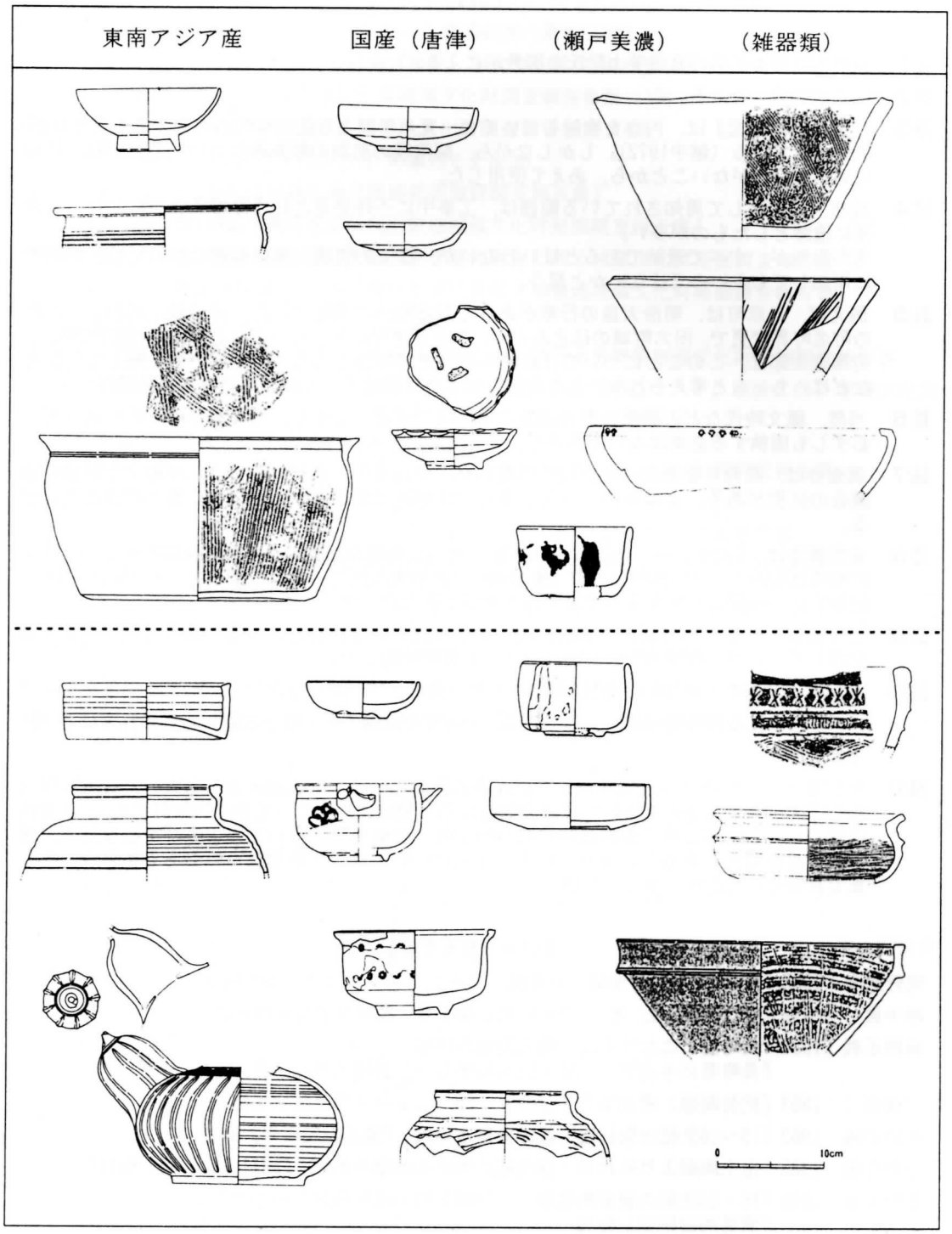
このような，社会・政治的な変遷が，考古学的成果と直接結びつくかどうかは別として，本質的に，考古学的な変遷と相関を持たせるべきであろう。試みに，今回の資料をあてはめると，大村町Ⅰ期，平戸町1号井戸・溝状石列3は，教会領期から豊臣公領期にかけて，大村町Ⅱ－2期，内下町2区12号土坑，豊後町土坑26は，豊臣公領期から徳川公領Ⅰ期に相当するものと考えられる。今後，このような視点から，長崎遺跡群の解明が進んでいくことを強く希望したい。

本稿の作成は，大村町（万才町・県1995）の調査に参加しながら，事情により，その報告にたずさわることができなかったことが，直接的な契機となっている。本稿により，その責を少しでも果たせたとすれば幸いである。なお，調査を通じて，認識不足の筆者に多くを御教示下さった宮崎貴夫氏に深く感謝申し上げたい。

図３　遺物の様相と変遷



第３－１図　遺物の様相と変遷



第３－２図　遺物の様相と変遷

【註】

註１　長崎市教育委員会の高田美由紀氏の御教示による。

註２　同氏の御教示による。

註３　『寛永長崎港図』は，内容を検討していくと，寛永年間より後の時代のものである可能性が指摘されている（越中1972）。しかしながら，開港後の初期の町並みについての資料は，ほかに適当なものがないことから，あえて使用した。

註４　現在，遺跡として周知されている範囲は，工事中に不時発見という形で調査が行われ，調査後に遺跡としたものが多い。
現市街地が，すべて遺跡であるとはいわないが，歴史的価値の高い範囲については，将来的に周知してもよいのではないかと思う。

註５　例えば，島原町は，明治天皇の行幸があって万才町へと改称された。その後，昭和三十八年の町名町界変更で，旧六町域のほとんどが，この万才町に含まれることとなった（安野1992）。司馬遼太郎は，このことについて「長崎市の歴史的原型である六カ町の町名を廃してしまうなどは，ちょっと考えられないような蛮行のように思える」と評している（司馬1977）。

註６　当然，縄文時代などの開港以前の調査にも応用できる。しかし，その場合は，旧町名などに必ずしも固執する必要はないであろう。

註７　調査者は，県教育委員会の場合は問題ないが，市の場合，市教育委員会と埋蔵文化財調査協議会の区別がある。文章中の表記をできるだけ簡潔にするため，単に県，市と記すこととする。

註８　安野眞幸は，「六町」→「内町」→「外町」という長崎の都市成立過程の通説に対し，六町の町割り当初から，その外側に外町（後の内町）が形成されていたと主張している（安野1992）。結果的に，今回はこの推論を検証することができなかった。

註９　とすれば，町建て当初頃の一括資料は，検出されていないことになる。筆者自身，やや矛盾を感じているが，今後の資料の増加を待って再度検討したい。

註10　大村町（万才町・県1995）ＳＫ207と内下町（築町・市1997）２区12号土坑で，同種の東南アジア産とされる焼締陶器が出土している。大村町では蓋，内下町では鉢と報告されている（図３参照）。

註11　安野眞幸が，開港から近世初頭までの長崎の変遷について，五期区分（①大村・有馬両領主時代②大村領時代③佐賀領時代④教会領時代⑤公領時代）を行っており（安野1992），基本的にはこれにしたがった。佐賀領時代については，時期も短くその在りようが不明なため，筆者は大村領時代に含めた。また，細かい年代については，不適切なものもあると思う。あくまで目安として理解いただきたい。

【引用・参考文献】

安野眞幸　1992『港市論 平戸・長崎・横瀬浦』日本エディタースクール出版部

越中勇　1972「『寛永長崎図』考」『研究紀要』第１号　長崎県立美術博物館

扇浦正義　1994「長崎港市における近世輸入陶磁の様相」
『長崎県の考古学　－中・近世特集号－』長崎県考古学会

大橋康二　1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.２

小野正敏　1985「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『ＭＵＳＥＵＭ』No.416

北野隆亮　1990「15・16世紀の貿易陶磁器　－1980年代の編年研究を中心として」
『貿易陶磁研究』No.10

司馬遼太郎1977『肥前の諸街道』街道をゆく11 朝日文芸文庫

鈴木秀典　1990「17世紀の貿易陶磁器に関する研究成果」『貿易陶磁研究』No.10
たばこと塩の博物館編1998『航路アジアへ！鎖国前夜の東西交流』
續伸一郎　1995「中世後期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
長崎県教育委員会1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集
長崎県教育委員会1998『桜町遺跡』長崎県文化財調査報告書第114集
長崎市　1991『市民グラフながさき 特集甦る』No.30
長崎市教育委員会1986『出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』
長崎市教育委員会1992a『長崎家庭裁判所敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』
長崎市教育委員会1997『築町遺跡』築町別館跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長崎市埋蔵文化財調査協議会1992b『朝日新聞社長崎支局敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』
長崎市埋蔵文化財調査協議会1993『栄町遺跡』
長崎市埋蔵文化財調査協議会1993『銅座町遺跡』十八銀行本店敷地埋蔵文化財発掘調査報告書
長崎市埋蔵文化財調査協議会1996『新地唐人荷蔵跡』「ホテルJALシティ」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長崎市埋蔵文化財調査協議会1996『万才町遺跡』朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
長崎市埋蔵文化財調査協議会1997『興善町遺跡』天満ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
永松実　1993「掘りだされた食文化の洋風化について」『長崎出島の食文化』親和銀行
永松実　1996「長崎の歴史と考古学」『掘り出された都市 江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク』東京都江戸東京博物館
原田博二　1999『図説　長崎歴史散歩　大航海時代にひらかれた国際都市』河出書房新社
藤澤良祐　1993「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史編四　瀬戸市
宮崎貴夫　1994「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」『長崎県の考古学－中・近世特集号－』長崎県考古学会
宮崎貴夫　1996「長崎市万才町遺跡の寛文３年の火災に伴う資料について」『第６回九州近世陶磁学会資料』
宮崎貴夫　1998「長崎県地域の貿易陶磁の様相－肥前西部・壱岐・対馬－」『貿易陶磁研究』No.18
宮崎貴夫　1999「遺物の「製作・使用・廃棄」についての覚書」『博多研究会誌』第７号　博多研究会
森　毅　1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第９　大阪市文化財協会